

☆ 子ども会 (学習会) だより ☆

MY SKY 第15号

マイ スカイ

1996年9月10日火曜日発行(毎週火曜日定期発行)

発行者

板野中学校

学習会

編集・文責：吉成正士

読者のみなさん、長らくお待たせいたしました！今学期もMY SKYをよろしく！

今回からしばらくは夏休みの報告になると思いますが、しっかり読んでみてください。
特に、今回のメインである「ゴンタこそがたたかいを」は、全員で読んでみてください。



がくしゅうかい いっぱくけんしゅう はびきの
◎学習会一泊研修(8月24日・25日：大阪羽曳野市・人権博物館リバティおおさか)

学習会の一泊研修として、今年は交流も兼ね、大阪に行ってきました。

まず24日の朝に板野中学校をバスで出発し、お昼過ぎに大阪の羽曳野市というところへ着きました。地元の中学生友の会に参加している中学生と交流するためです。昼食をとったのですが、やはり大阪、0-157に対して敏感で、手洗いから昼食の内容に至るまで気配りが細やかで、細心の注意を払うようになっていました。

昼食の後、早速交流会を開きました。かわいい子、かっこいい子ばかりで、すごくイキイキしていましたよ。まずは互いの学校や生活の状況報告、そして今のそれぞれの思いを語り合いました。

その後各学年に分かれ交流会を行いました。私たち大人は大人で交流会を行ったわけですが、その場に、以前から連絡をとって来ていただいていた、音野修平さんと出会うことができました。

音野さんは地元出身の方で、何年か前に本校で部落問題学習の資料として使っていた「ゴンタこそがたたかいを」という資料を書いた方です。まずは、その資料を読んでみてください。

ゴンタこそがたたかいを ～部落の青年がたどりついたところ～

おと の しゅう へい
音 野 修 平

お
一生いたちー

ぼくは、1955(昭和30)年9月21日、大阪府H市M地区の被差別部落に生まれ

た。母は、2人の男の子を連れて父と再婚^{さいこん}していた。したがって義理^{ぎり}の兄をいれば三男だが、音野^{おの}の戸籍^{こせき}上は長男である。下に妹と弟が一人ずついる。

父は、当時^{だいく}、大工をしていた。父は、小学校1年生の途中で学校をやめたという。だからまったくの無学^{むがく}といってよい。そういうこともあって、ぼくの小さい頃は、とてもぼくに期待していたように思う。よく「おのれの名前を書いてみい」といわれ、書かされた。いま思えば、学校へ行けなかった父の唯一^{ゆいいつ}の教育だったのである。そういう父の期待をになって、近くの寺がやっていた保育園に行くことになったが、同じ村の仲間にいじめられ、それがいやでやめてしまった。

1961(昭和36)年、H小学校に入学した。義理の兄2人をいれて7人の家族が、父の仕事一本にたよってくらしていたのだから、みじめな生活だった。

ぼくは、2年生以後、宿題をしたことがない。落ち着いて勉強できる家庭でなかったこともあるが、鉛筆^{えんぴつ}すらない生活だったのである。機械でけずった鉛筆を、かっこいい筆箱^{ふでばこ}にずらっとならべている友達^{ともだち}の間に、こんなぼくが座^{すわ}っていた。

ぼくは「準^{じゅん}援^{えん}」(準^{じゅん}要^{よう}保^ほ護^ご児^じ童^{どう})に指定された。それもまたいやなものであった。教師は、「あとで職員室へこい」とだけいうし、何ごとかと思っけて行くと、ほかにも呼ばれた連中^{れんちゅう}が大勢来ている。M地区の貧しい子が多いというのは、ぼくには直感^{ちよっかん}でわかる。袋にはいった学用品をもらって、教室に帰らねばならない。友達^{ともだち}から、茶化^{ちや}したような羨望^{せんぼう}の声をかけられるのがたまらなくいやだった。あばれ者だったぼくは、ほかのことだったら、むなぐらのひとつもつかまえてだまらせたのに、こんなときは、コソコソと逃げるように帰った。帰り道のなんともいえない暗い気持ちを、級友たちはわかってくれていたのだろうか。

決定的にみんなとちがう道を歩みはじめたのは、4年生からであった。当時父は、ブロック工^{こう}として独立しており、人手がほしかった。そのため、夏休みの1日ぼくを連れて出たところ、ぼくは予想以上に父の仕事に役立ったのである。それ以後父は、ぼくに学校へ行けとはいわなくなり、仕事のあるときは必ずぼくをつれて出るようになった。学校へは、父に仕事のない雨の日しか行けなくなった。勉強は、ますますわからなくなった。しかし、ぼくにとって学校は、きつい肉体労働から解放される唯一の場所となっていたと同時に、ぼくが学校で羽根をのばせばのばすほど、教師やそのとりまきの子どもたちにとって、ぼくはますます「問題児」となったのである。

宿題をやっていないぼくは、その時間中いつも廊下^{ろうか}に立たされた。しかも授業が

すめば、立たされて入れてもらえなかった教室の罰掃除である。外で立っていても、毎日のことになるとつらい。つい廊下を走りまわり仲間といっしょに逃げることになる。教室にいても奇声をあげ、ケンカをしてまわる。

6年生のとき、はじめて物を盗んだ。保健室の冷蔵庫にはいついたドリンク剤である。テレビのコマーシャルでは見るが、どんなものか飲んだことがなかったし、つまみ食いをしてみたのである。教室にいてもおこられるばかりでおもしろくないぼくは、腹が痛いといって保健室へ行き、養護の先生の目をぬすんで「つまみ飲み」を2回ほどやった。4年生のときから働かされるぼくの家生活。仕事からドロまみれになり、ボロボロのようにつかれた身体をひきずって帰る道で出会う友達の日。そんな状況がぼくをより卑屈にしていっていった。

—中学生時代—

小学校6年間を形式的に卒業し、T中学校に入学した。

この時分、父は仕事をあまりしなくなり、魚釣りなど遊びに熱中しはじめた。もちろん生活は苦しくなり、母の1日400円にしかない内職が唯一の収入の道となった。だが皮肉にもそのことによって、ぼくは毎日学校へ行けるようになった。

バスケットボールのクラブに熱中した。上背があるうえに、労働できたえた体力がある。1年生ですでにキャプテンになった。自分の全存在をバスケットにうちこみ、教師からは、よくなったといわれたが、生活の基盤は変わっていないのだから、本当によくなったのではなかった。

音楽の時間、ハーモニカやフエを忘れたといって立たされる。忘れっぱなしなのだから、家にないのだと気づいてくれてもよさそうなのに、教師は根気づよく立たせ、運動場を走らせる。ハーモニカひとつ買えない生活の恥（当時のぼくにとっては恥としか考えられない）をさらさせたいかのよう。

弁当の時間、みんなは本の形をした弁当やプラスチックの弁当に、美しくかざりたてられたごちそうを食う。ぼくの弁当は、メシだけしかはいつていない、あちこちへっこんでぶざまなかつこうをしている。弁当の時間は、いたたまれぬ思いであった。ぼくのとった方法は、母がつくってくれた弁当をすて、人の弁当を食うことだった。すてるのも、誰にも見られないところをさがし、こっそりすてなければならない。友達だって、いつもいつも弁当をくれるわけではないから、ときには、おどしたり、かす

めとったりせねばならない。

この時分^{じぶん}から食肉はブームとなり、精肉関係の仕事をしている家はいそがしいが金まわりはよくなってきた。共働^{ともばたら}きの親のかわりに、1日1000円、2000円の金^{ふうちよう}が子どもをお守りする風潮が出ていたのである。ぼくの家はそんな家とは関係なかったため、同じ部落の子どもでありながら最底辺^{さいていへん}の貧しい生活である。ぼくの自尊心^{じそんしん}はバスケットによってかろうじてささえられていたといつてよい。

そんな中学の2年生のときに、二つの大きな事件がおこった。

ひとつは、父がまた大きな仕事をたのまれたため、ふたたび学校を休まねばならなくなつたことである。家のことを考えると、ぼくが手伝わざるをえなかった。2年生の夏休み、ぼくはバスケットクラブを退部した。それまでも仕事のあるときは、クラブがすんでつかれたからだで手伝い^{てつだい}にかけつけていた。クラブ活動を続けるためには、他の子よりも大きな障害をのりこえていたつもりだ。勉強はわからなかったし、そんなことで自分を確かめるしかなかったのである。しかし、それさえもかなわなかったのである。

もうひとつのぼくにとっての大きな事件というのは、二番目の兄が結婚差別にあつたことである。ある娘さん^{むすめ}とつきあつて結婚の申し込みをしたところ、M地区に住んでいるということから「どこの馬^{うま}の骨^{ほね}ともわからんものにやれない」と、ことわられた。兄のショックも大きかつただろうが、ぼくにとつても大きな衝^{しょう}撃^{げき}であつた。M地区が差別されていることはそれとなく知っていたが、そのことよりも、貧しさによる同じむらのなかでの劣等感^{れつとうかん}の方が大きかつた。同盟M支部はあつたが、兄のできごとをいっていくなど思いつかず、ぼくにできたことは、おりから学校で「同和」教育が盛^{さか}んになっていたこともあつて、担任の教師に相談することであつた。この事件は差別されつばなしでおわつたが、これを契機^{けいき}に、ぼくに部落民としての意識が芽ばえたといえる。

部落民としての意識は芽ばえたが、社会的立場^{たちば}の自覚^{じかく}には結びつかない。むしろ、差別からのがれ、苦しく展望のない生活^{くつ}に屈して、ますます暴^{あば}れおりはひどくなつていった。次号後編「ーぼく^{めざ}の目覚めー」「ー荒^あれるころー」へとつづく

今回は前編とし、次号は後編として載せていただくことにします。楽しみにしておいてください。

実はこの日の夕方、地元のフィールドワークをした後、お風呂、夕食^すを済ませ、夜にな

と き 9月22日(日) 2:30~5:00 ところ 板野中学校大会議室



さて、2学期がスタートしましたが、行事続きで、大変忙^{いそが}しいと思います。私も、休日がない状態です。お互いバテないように、健康に気をつけてがんばりましょう！！

